



主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

肉となった言（ことば）に耳を傾ける

あらためて主の降誕おめでとうございます。夜半のミサでわたしたちは、神が不可能を可能にして人類の救いのために御子をお遣わしになったことを黙想しました。今日、ヨハネ福音書が語る神の救いのご計画を黙想することにしましょう。

ヨハネ福音書は、神である御言葉の働きについて語ります。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」（1・1）「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（1・3）一つの点に注目してみました。それは、「肉となった言（ことば）に耳を傾ける」ということです。

「耳を傾ける。」これまでの司祭生活の中で、わたしには耳に残っている言葉、今でも忘れない言葉がいくつかあります。これまで赴任した教会でいろいろな人と出会い、いろいろなことを言われましたが、中でも「貴重な意見だったなあ」と振り返る言葉があります。

初めて赴任した教会でのことでした。生意気なことを言っていた時期だったと思います。一度だけ、主任司祭にお叱りを受けたことがありました。「お前なあ、60歳にならないと言うべきでない言葉もあるんだぞ」と言われました。ある奉仕のグループに言った無責任な言葉を、これは不適切であると叱られたのでした。

また、初めて主任司祭になった小教区で、正月に男性信徒が司祭館に訪ねてきました。玄関で座り込みましたから、しこたまお酒を飲んでいたのでしょうか。その人から「お前はこの教会の信者一人一人の声を聞いてみようと思ったことがあるか」と言われ、わたしは「全員の声を聞くのは難しい。全世帯、家庭訪問して回るわけにはいかないから」と答えたのです。すると「全世帯、一軒一軒訪ねたら、すべての信者の声が聞けるじゃないか」と言い返されたのです。今でもその言葉は、わたしの中で引っかかっています。

言葉は、だれかが耳を澄まして聞いたときに、大きな働きをすることがあります。だれも聞いてくれなければ、言葉は通り過ぎ、消え去っていくでしょう。ところが、だれかが語られる言葉に真剣に耳を傾けるなら、一つの言葉が何十人、何百人を動かし、時には世界を動かし歴史を変えたりするのです。

今日の福音朗読は、おいでになった御子、世の救い主を「言（ことば）」という表し方で示しています。すると、神の言（ことば）がわたしたちに何を期待しているかを知るためには、肉となった言（ことば）に、真剣に耳を傾けることが必要ではないでしょうか。

しかしながら、人間は弱さを持った生き物なので、自分が聞きたくないことについては耳を塞ぐことがあります。その人のために必要なことを言っているのに、聞き入れたくないので耳を貸さず、聞こうとしないのです。その人の健康を思って言っている言葉、その人の将来を思って

言っている言葉であっても、それを聞きたくないと思って拒むことがあるのです。

神は御子を、言（ことば）としてお遣わしになりました。そして言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られました。御子はすべての人を造り上げ、すべての人を導く言葉をもっておられます。今は幼子として、わたしたちの間に宿っておられます。わたしたちは真剣に、また謙虚に耳を傾ける必要があるのです。

肉となった言（ことば）、幼子イエスの前に、もう一度近づきましょう。一人ひとりに必要な声を聞き取るために、静かに耳を傾けましょう。自分さえよければとか、独りよがりな生き方をして、さまざまな雑音をため込んでいるかも知れません。

それら雑音を一切追い出して、肉となった言（ことば）の語り掛けに自分を従わせましょう。謙虚に耳を傾ける人に与えられる報いは次の通りです。「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」（1・12）今日一日、肉となった言（ことば）の声にひたることにしましょう。

聖家族(マタイ 2:13-15,19-23)